

心掛かりの月日を送られける。一切の女その夫の志一つを頼みにして、國里萬里を隔てても有り附く物ぞかし。其男に辛く當られなば、女の身にしては世に悲しき事是れより外は有らじ。此内方に限らず、男情無き時は必ず悪心さし挟み、一命終る事を厭はぬ族は女心なり。或は子の有る中は是れに引かれ、親の無き人は入前案じ、是非堪忍是れぞ女の嗜みと云へり。また夫婦間別義無きを姑由無き事に暇出だす、天の咎めも有るべき料なり。また妻を求めて兩親に不幸に成る輩沙汰に及ばぬ僻事、世に人と云はれて住めるは内外共に煩かし。總じて武家の内證方へは、從弟までの出入尤もの掟なり。とかくは他の心易きより不義も發る事なり。此人頼もしき浪人四五人も出で入りさせ、身上取持ち給へり。何れも御厚恩に預り奥までも出で入り、年月町家住まひにて送りぬ。此中に何の某とかや云へる浪人、色好み過ぎて是れより身の難儀をせしに、其れにも懲りずして作り眼して、召使の女などに言葉優しく掛けて、細工の疊紙など出だしけるは侍の妄りがはしき爲業なり。斯様の事より内義の心根可笑氣に成り、日比夫を恨み差し出で臨へ心通ひぬ。彼の浪人此色を見て思ひ掛け初め隠し文遣はしけるに、我も走り書はすれども外なる人に頼みて、細細と書き認め、如何にしてか通はせ、其後は忍ぶ事度重なれば、人も沙汰して奥へ通ふ男ありと、大事を構はず下下より云ひ出だすにや、奉公人の出替り時より名の立ちける。亭主心元なく人知れず穿鑿するに、件の文通ひ見出だし、口惜しき事胸に居ゑかねしが、最前賢き人の女敵討つ程の者にはあらずとの御一言爰なりと、落ち付けて思案を廻らし、譜代の侍一人連れて志す日なれば、二上が嶽に參詣と朝疾く屋

形を出でて、牛駒山深く分け入りて里人を招き、年經し狐の入る事ありとて金を與へければ、本より狩人の手馴れし業、暫しの内に取り殺して此方へ渡しぬ。其れを即ち藪包にして下人に持たせ、夜に入つて私宅へ歸り、今宵は霜夜の淋しきとて、日比諺の友とせし人數多集め、夜半の鐘を下人と相圖して廊下にて彼の狐を斬り伏せ、何か忍びし曲者切りけるぞ、やれ燈火燈火、羽織黒し丸頭巾被きしぞと聲掛くるに、座敷各謠ひさして駆付け、さて手燭振上げ見るに、脊の禿げたる狐の脇腹より切り下げられ、是れより外には無かりき。如何様人にも化くべき有様、皆皆恐ろしく、其儘捨てて何の仔細も無し。さては此程申せし事此狐の障礙ならんと沙汰して、心の如く世上静まりて後、一年過ぎて女は里へ送り返し、いよいよ其身は別條無く役義を相勤め、諸事の首尾好く御加増まで下し賜はりぬ。其後分別するに、此密夫此儘に置く事も無念なり、然れども何れを思ひ當るも無し。猶また筆は見知らず、氣を癡す程工夫を廻らしけるに、紫の女、清少納言が作れる草子の詞とも書き交へて、文章の氣高き事大方ならぬ媚者の心を運びし。是れを思ふに歌學無き人の成るべき事にあらず。此家中にて其道執心の人人を數ふるに、其手跡は残らず見知りぬ。此一兩年京都の者として御城下の町外れに假宿して、歌書の講釋する者あるの由、是れのみ思ひ付けて其許に尋ね行き、自筆の物など事に寄せて見合せけるに、疑ひ無く最前の同筆なれば、四方の人を拂ひ密密に彼狀を取出だし、是れ其方へ頼みし方を密かに知らせ給へ、さも無きに於ては其方一命極る所なりと、一筋に責めかけ、眼色變へて問はれしに、此人驚き陳するまでも無く、其名を指して理無く頼まれける程に、何の心も無く書

きつると、始めを委細に語れば、其身に科は無かりき。然れば此事此後他言せらるる事勿れ、外に漏れなば其方命の終りと起請して、彼の浪人呼び寄せ、奈良の都の八重櫻見に同道して存分に討つて捨て、此事世間には嘗て知らず、其家永く榮えし。

三 國の掟は智慧の海山

古代大隅の國司に仕置者あり。最明寺御修行の如く、虛病を構へ親類にも對談せず、況して外人不通に成りて、御役義當分我れに勝れる功者に預け、其身は廻國の道者に紛れて、一年餘り城下離れて國の末末を廻りしに、申せば一國なれど細かに見る事果し無く、君が代の日の本の海山、思ひ知られける捲へてさへ、旅の電は面白し、誠の有る修行如何ばかりと思ふ。津に入つての舟商人、里に行けば稍白の音のみ己がさまさまの世渡り、隨縁眞如の波立たぬ時無く、毎日人の面を見替へ、山の形も松栢同じからず、岨つたひの一村にも一大事の寺を立て、林の中に小社あり、藥師らしきの法師の手習の指南、また壘を敷きたる家居も有りて、老後の思ひ出に二三人、節こそ合はね曲舞歌ふなど、野の末、山の奥までも人の心の昔とは各別に成りぬ。また分別比の男ども高聲に沙汰しけるは、仕置者の智謀を云ひ出し理非は知れる事、爰は慈悲の有るべき所、是れは餘り手温しなどとして、濟みたる裁許を評判して、さすが其役人として兩方言句を絶して、尤も至極に濟まさされけると褒美をするを、下下の口からは慮外とも思はざりき。總じて斯かる扮は理非

の二つは明白にして、其所の者ならで仔細を知らざる事あり。遠國の出入を都にて聞き届け、然も非は聞きを好く、理は正直を頼みに物事疎く、辯舌あり文者あり、とかくは疎略にする事にあらずと、野夫が譏りに得道して是れぞ修行の徳と悦ぶは、其身正道發明なるが故なり。其れより行き暮れて民家の所に一宿せしに、戸に掛金無く、都に樞もせず、心安き境界は用心の事尋ねしに、殿の御仕置宜しく、盜賊海賊絶えて戸鎖さぬ御代は今ぞと語りぬ。明けて又の日は時雨に道もはかどらず、やうやう三里餘り行きて旅泊の夢も結びしに、主人荒けなく門を閉ちて灯火消すも有るに、燈籠取り廻し山刀枕近く置いて、旅人も夜聴うまします。是程念を入れたる上に、其油單句盜まれ給はば、此方の御損と氣を付けける。如何なる事ぞと尋ねけるに、御仕置悪しく、押し入強盜假りにも油斷は成らず、唐土の盜跖と相住同前と申す。夜前と三里隔てて各別なる世の様なり。後の宿の豊かなる事を語れば、亭主笑つて、さぞ有るべし、其宿には金銀衣類物貯へある者一人も無し、誰に何取らるべき物もあらず、其日暮しの處なり。此の所は何れも富貴にして、子孫に譲る財寶を持つて世を心安く渡れば、外より目掛け夜は騒がしきと語りぬ。此二宿の思はく天地の相違あり、一國一同に治めずばあるべからずと、猶山山浦浦を廻りけるに、上方へ渡海する大湊に着きて日和待ちの船景色見しに、幸ひなる風に出船の止められ僉議に迷惑するを聞けば、今日の曙の事とや、京に通ひて染衣商賣せし人、金貳千兩の用意して一番船に乗合の友あれば、下人も連れず、小判は身に付け、近所へ暇乞して出でしに、帆柱立てて風を急きけるに、舟に今一人遅くて時刻移ると聲聲に云ふにぞ、船

中皆皆腹立して、爰にまします三人は其人の同道なれば、疾く誘ひ給へと云ふにぞ、一人残して二人は陸に上がり、彼の絹屋が許に行き、御内儀御亭主は出船に見えぬがと、門口より誘ひけるに、女は立ち出で朝疾く立つて行かれしが、今まで舟に乗られぬ事はれ不思議なりと、數多人頼みして尋ねさせけるに、舟場に行き近邊の眞砂路遙かに、菜萐の木原の片陰に切り伏せ、肌なる金子無かりし。さて海賊の爲業と先づ船留して穿鑿すれども知れ難く、此の浦役の奉行も思案に及ばず、城下へ罷りて此僉議遂げんと大勢召連れての難儀、是れまた諸人の煩ひなれば、修行者姿を顯はし、浦奉行に對面あれば驚き、如何なる故に斯かる御事ぞと尋ねしに、今は隠さず仕置の爲めの廻國と語り、さて此度の穿鑿、城下までは萬人の迷惑を思ひ量りて、是れにて悪人を僉議すべし。正しく是れは其三人の同道人の爲業吟味有るべしと内談極め、彼の三人召し寄せられ、さまざま僉議に其科顯はれ、大法の御決めに逢ひぬ。其後浦奉行仕置者に向ひ、早速其同道人御疑ひの發明如何なる思召入よりぞと尋ねけるに、彼の二人舟より上がり、御内儀御亭主は遅いと申せしとや。常ならば亭主の名を呼ぶべきに、事を知るが故に自然と御内儀亭主はと申す、此一言より是れを僉議の本と語られしに、此の才智感じぬ。末末此の心柄の一國の仕置、事無く納まりけるとなり。

三 掘れども盡きぬ佛石

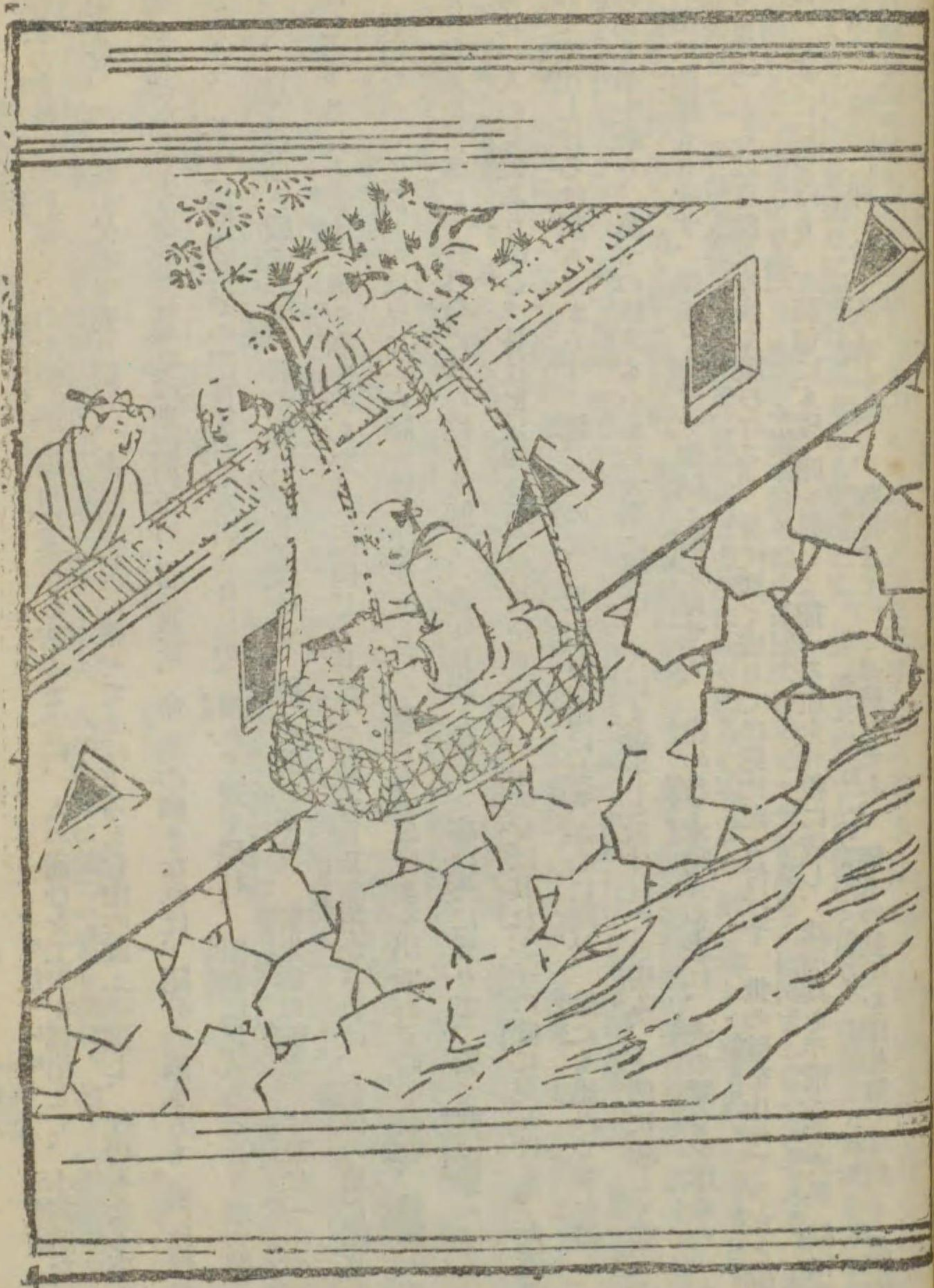
古代越後の大將智を本として國を治められしに、萬民其心の如く隨へるは是れ天性なり。萬づの事に一つも

私無かりき。莊子には吉日良辰に爪を切り耳の垢を除くと云へり。此殿毎年正月六日に初めて手づから爪を切らるる事吉例なり。刀物は鞘に納まり、御爪は扇を廣げさせ給ひて是れを置かせられ、御近所使を召して捨てよとの仰せなれば立寄りしに、先づ其儘と外の御用を仰せられしに、幾人か御前に立替りぬ。其後何の某とかや未だ若年なりしが扇の土なる御爪を敷へて、不思議がましき貞附して其儘は捨てに立たざりし。如何にして捨てざらんと仰せければ、御爪の切方九つ有り、今一つ不足を改めける時、是れに有りとて御膝の陰より出だし給ひぬ。此一つは故意と隠し置かせられ、人の心見給ふに、誰れか數よむ程の氣を附けざりし。總じて大名の御前へ愚かなる人は出だし置くべきにあらず、是程發明なる太守なれども、世の費を知らせ給はぬは、此家に生れさせ給ひ、何事も御心に叶ふ故ぞかし。爰に諸役御免遊ばされ行年五十を過ぎ、善惡の堺をも辨へず、唯だ正直を本とする男、一生無我なるを譽めさせられ、御咄の衆中に打交はり朝夕相勤めしが、御機嫌に任せ世の不審なる事ども御物語ありしに、彼男云ひ出だしけるは、當國柏崎の町中に自然石の地藏六體まで立たせ給ふ。此石金輪際より生ひ抜けたりと古人の傳へと申し上ぐる。然らば掘らせて見るべし。里人役に掛つて鋤の齒音を揃へ、鋤の土車轟かし、十日に餘り掘りけれども、限り知れず、後には眞砂は山ならで捨所無く、民家を潰し往來絶えて民百姓の難儀と成りぬ。數萬の人足日數經りて七丈餘り掘り入れれば、次第に此岩廣く成りて、いよいよ國土の費なれども、大將の御一言返し難くて在りける。或夕暮に此奉行の中に貳人身震して口走り、抑も此石は天長地久神代二柱以來、神祕

奇妙の靈佛なるに、今此時士民穢れたる手して掘らせること故無し。七日七夜の大風車軸の後海中泥波を立て、四海覆へりて一國人種置かじと灼焉にののしれば、萬民下より駈け上がり、政道掟も構はず、一命には代へ難しと、刹那の中に逃げ去りぬ。驚く事大方ならず、此事言上申す。諸山の尊僧を集め地祭執行、元の如くに納めぬ。國守に有りたきは永永筋目正しき良き家老なり。其後此事密かに聞くに、萬人の煩ひ世の費思ひ量りて、奉行に申し含めて、斯くは納められしとなり。或時また彼の正直男御前に出でて、男猫に三毛と申す事世に無き物と申し上ぐる。是れも御意にて國中尋ねけるに、彼者申せし如く女猫は有れど男は無かりき。大名の仰せなれば民家里里探しける。何の用にも立たざる事に、一國の費積り無き事ぞかし。終に無いに極まり、其通りにして止みける。家の執權評定して、とかく此男貴人の御前に出だすべき者にあらずと、其れより後世を願はせ世の交りを止めける。何れ三毛の男猫無い物かと思へば、何程も無く連れ來りて御目に掛けしとなり。

四 中にぶらりこ俄年寄

古代人の女の人を見限り、また其人に見限らるる事を語り殘せし。播州の一城、久しく成りて修理加へらるる時、番匠、左官、瓦葺、諸職人の棟梁の手分までして、既に普請方に功者の奉行に仰せられ、大方の義は足代も無く萬事の用安り、然も抄り、物には思案をすべき事と云へり。物廣く石垣敷丈にして、此上の



高橋北の方殊に雨打強く、白土所所損ねに是れを繕ふまでに、人の通ひを工夫を爲出して、小判形なる籠を組ませ、四つ繩を付けて振り振り、左官を是れに乗せて上げ下ろし自由の調ふ手廻し、此巧みなる事を入皆感じぬ。されども是れに乗るは地獄の上の一足飛び、命掛の働きなれば、随分心強き人も魂は浮世に無かりき。其中に同國高砂の左官年若なる男なりしが、優れて爰を恐れ、組籠に足入るるより忽ち夢中に成つて、只今最期と觀念して、兩手を壓め身を慄はせ、額に波を寄せ、鬢先雪を被き、半時に一生の老を現はしぬ。是れぞ唐土の何の額を打ちたるに相同じ。其れより此左官正氣附かざれば、高砂の里に歸されしに、我宿ながら茫然と人は見ながら誰を覺えず在りしに、變らぬ者は此里を出て行く時の着物、飾磨の褐染に常の紋所を目印に、此外容に昔の残る所無く、妻女見交し悲しき事は外に成りて、暫く興は覺めける。此左官に一人の父親ありける。是れを見舞ひ來て居並びしに、中中老父は其れが子の様に見えける。此妻添ひかねて家出しけるは頼もしからず。總じての女、世に有る時は其夫が心に隨ひ、姑にも恐れて孝を盡し、永く縁ある事を祈り、萬づの始末も心から大事に掛け、人にも善きと云はれたき嗜み、下部に悪しく當らず、世の業に油斷もさせず、朝疾く起きて髪結ふ形を見せず、夜の行水暗きを恐れ、夫の疑ひを休めぬ。女斯く身を持つからは自然とも家を調ひける。身代薄く成りては男に暇も付けず、世の稼を止めて下女と争ひ、長寢の爲めに病を作り、五節句にも髪頭を亂し、揃へる肌を九枚に成し、諸道具を手荒く、大黒柱に鐵漿吹き掛け、鴨居に押し當て灸箸を削り、腹貼まくつて糸屑を包み、接木の初咲を用捨無く手折り、書院の

軒端は洗濯物の竿もたせと成し、とても人の物と成る賣家と住み荒し、肴掛の鰯も煎じ茶の菓子に引き裂き、何も無ければ其通りに朔日二十八日も精進して、佛棚も書出しの置所と成し、内證より其家を潰しぬ。左官女房も今の病者を見捨て、然のみ形も耻ぢぬ中に後夫を求めて世を渡らんは浅ましき心入をかし。左官は病氣重りて、哀れや最期まで妻女の名を呼びて枕に在りぬる心地して、終に空しく成りぬ。三十五日も立ちやらざるに男盛の者と縁を結びぬ。左官が親是れを憎みて、女不届の書付國の御法度所へ言上申せば、其者ども召し寄せられ、先づ今添ふ男に何とて夫の有る女を夫妻には致しけるぞと御僉議の時、前の男は病死しまつるの以後に迎へたる段段申し上ぐる。其男以前の名こそ替れ、今に世に在り、某が存じたりと左官位牌を取り寄せられ、是れが自筆の暇状を出だすべし、然も無きに於ては、其者世に亡くても存生の中に家を立ち退くからは密夫に紛れ無しと仰せ出ださるれども、前夫の暇の證無く女の越度に極まる。男は前の仔細は存ぜず、親の手前より貰ひ受くるの由身拔を申し上ぐる。理一通りは聞えぬ。然らば此取結びの中立ちの者御尋ね有りしに、已等ばかりの相對なり。仲人無き上は其科兩人逃れざる者なれども、死人孝養に命を助くる替りに、女は髪を剃るべし、男は國遠、女の親は處を拂はれける。誠に御慈悲の時なるかな。

**五** 取遣無しに天下徳政

古代萬氏の商賣薄く、里人は猶困窮して自然と道を反き、人の心慮に成つて實を失ひ、都さへ借錢公事の外

は無く、疎く成るは世を渡り、貧者は渴命に及べり。然るに由つて夜盗も白日の沙汰に成りぬ。京都の奉行政道に困憊み給ひ、此旨奏聞あれば、諸共に僉議あつての後、古例に任せ天下徳政に爲して皆免の時、改めて掟を正せとの勅命、其日平安城八つ口に、東西南北早馬にし、徳政の世と觸れ渡しぬ。八月下旬なるに、大年の心地に成り、律義に請け拂ひするも有り、大帳を焼くも有り、手形取亂して男泣の宿も有り、辱なき世とて祝ひ酒飲む人も有り、是程各別なる世の有様、分限は人の爲めと成り、貧しき者は人の物を主に成りて、大方金銀入り渡り、萬づの事も當分は鳴りを止めける。就中伊勢講の錢箱、女の去荷物返さぬ程、勿體なく可笑しきは無しと、其頃三條に蒔繪細工せし某とや、女不縁にて昨日の暮方暇状添へて親里に返しぬ。此女房尋常ならず、然も産月なりけるが、仔細無く男子を平産して未だ乳房にも附かざるを、仲立せし人の許に遣はし、此子は母親の腹を貸物なり、徳政の通り此方に損をして父の物にと云ひける。夫の方へ此事を申せば、父親の種こそ貸物なれ、此方の損にして女の物にと申す。色色暖へども兩方意地を立て、是れを更に聞き入れず、迷惑するは仲人にて、此段奉行所へ御訴訟申せば、兩方親類まで召寄せられ、此度徳政の世と成り、我物取らで歎く事世間に遍く成りしに、汝等は我物を人の物にして損を顧みぬ所温厚しき爲業なり。男女の申分何れに是非を付け難し。其子十五歳に成るまで仲人に預け置くなり、自分の智慧付けて父の種を貸物と云ふや、母の腹を貸物と申すや、其れが詞を證據に申付くべし。必ず十五に成るまでは子を仲人に預け、育は兩方より續けて、男も女も朝暮其子が側を離れず是れを守り育つべし。自然病死は所の者吟味の上仔細無し。萬一怪我させるに於ては曲事たるべしと仰せ渡さるるを承り、公儀は違背ならず、難儀ながら毎日毎夜仲人の許に行きて是れを育てけるに、世上見る所も煩く、女は悲しく、夫は渡世欠けて次第に迷惑して、何時と無く夫婦和談して、昔の如く二人が中の子にしたき旨、仲人を頼み重ねて願ひ申上ぐれば、其通りに濟みて初めに替り夫婦の語らひ親しく、其子仁と成り世渡に賢く金銀儲け、二親に孝を盡しけるが、或時祇園祭の山の渡れる中に、月鉾の通りたる後に釜掘山とて、二十四孝の中なる郭巨が我子を埋みぬる餓の勢ひ、京の何れの細工が作り成して生きて働く風情あり。人は是れに沙汰して、如何に親の孝なればとて我子を埋むる事や有る、黄金の釜が出ぬ時は其命を失ふなり。是れなる人も天下徳政の時父母不合にて、父の子にあらず母の子にて無し、未だ幼きを論じ既に命危かりしが、天人を殺さず今成人して、却て二親に孝ある人やと昔を語り聞かせぬ。此一子はれより父母に怨み發りて、貯へし金銀取つて何處へか身を隠しぬ。

西鵬

新可笑記

卷四目錄

一

舟路の難儀

武士は心の海に油断せぬ事

二

歌の姿の美女二人

武士は神主に成る身の事

三

市に紛るる武士

武士は外なる願せまじき事

四

書置の思案箱

武士は其家繼ぐべきに見立あるまじき事

五

兩方一度に神降ろし

武士は越度も穿鑿の仕様ある事

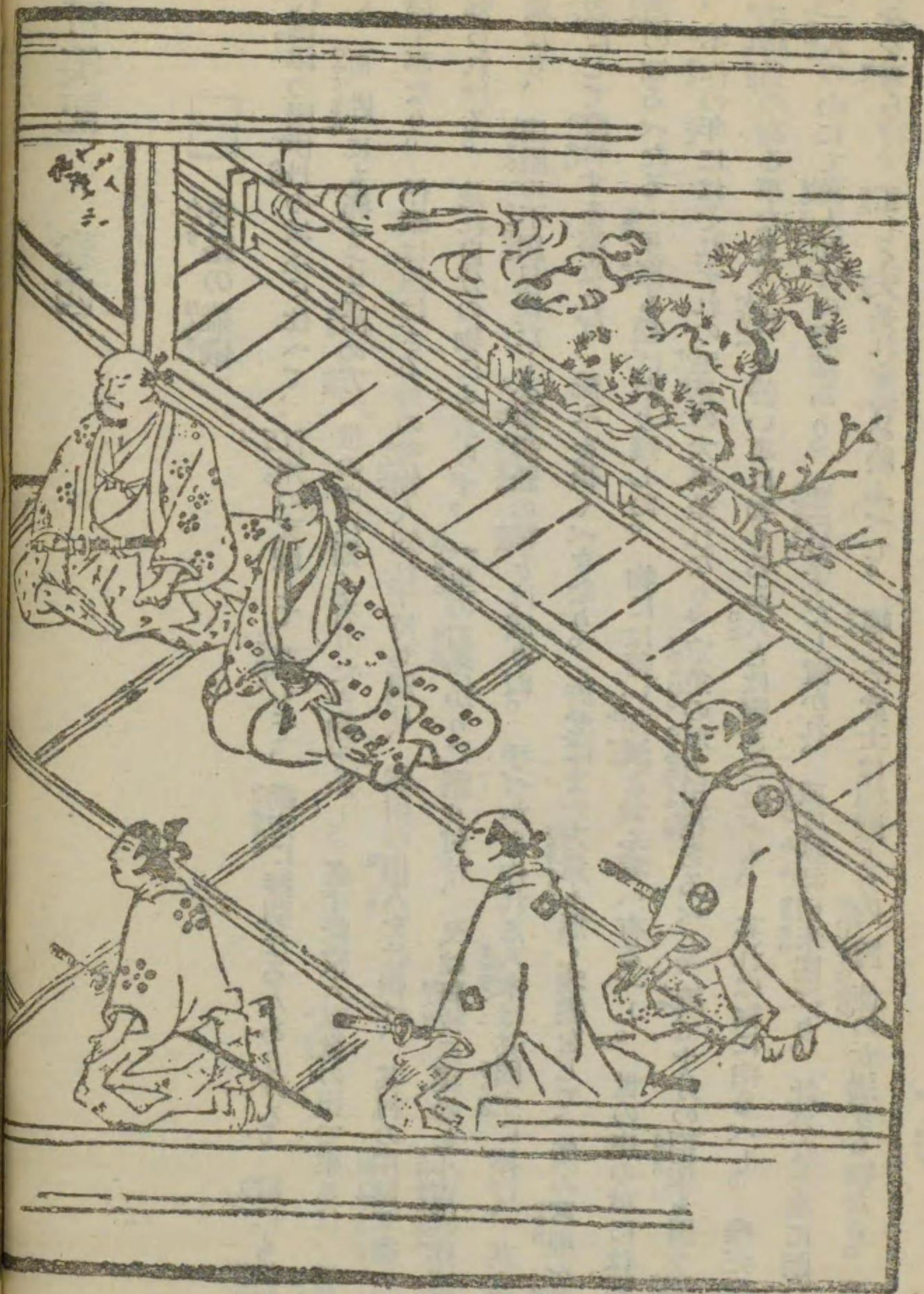
新可笑記

卷四

一 舟路の難儀

古代攝津の國伊丹の城主に仕へて、江州の支配して某とて、勘定に發明なる人ありける。殿にも御爲め善く、百姓にも痛まざる治め方、世の中は斯く有りたき物ぞかし。必ず此役人私欲の出で來るは、皆里人の爲す事なり。仔細は思はざる外の音物人知れず持ち運び、無用の出入を仕掛け、其村の庄屋年寄の良を見知られける。是れ自分の物にもあらず、一里の石掛かりに割り付け、又は軒役に集めし小百姓迷惑する事重なり、庄屋の不届見出だし公事訴訟の種とは成りぬ。手づから作れる八木は其國主に捧げ、其食物は雜穀にして渡世する事なれば、憐みを掛くべきなり。許せばまた方量も無く我儘をして、所の宮地を狹め、海道を知るべなる一里塚も松ばかり残りぬ。物には善い加減と云ふ考へ有るべし。世の中の秋には強く取り、不作の年にはそれぞれの毛見の大事是れなり。定免の取方用捨あるべし。總て十分の稻葉も田を逆らうて毛勝負の有る事なり。古も善い事に物くる人とは書きつれども、其れは物に由るべし。唯だ欲を離れ一人の心にて萬人助けの道理あり。知行を下だし置かれ、或は扶持切米賜はり、此外なる事に願ひして其身を奢らば、正しく天是れを咎め給ふべし。總じて武士は相應より内證使の女過ぎる物なり。是れ榮





華の餘り世間に知れぬ費ありて、結句表向の若黨仲間不足ありて、肝心の武役を缺く事横道なり。此代官諸事に其難一つも無く、正直を以て大役を治められしが、美女の翫び止む事無く、末は是れにて身の果つべき始めなり。其比神崎の里に遊君を集め、中町の長者と云へるは、高倉院の御時齋藤瀧口に相馴れし横笛が母なり。此女は大方無雙の能者なれば、建禮門院の端下者に召し上げられ、世に情の深き事盛衰記に見えたり。此由縁にて今も遊女の浪枕、契りは一夜川の水の心に成し、岸の柳の何時なりと、人の戀風の吹く時靡くも面白し。春の雨の玉にも脱道を拵へ、夜毎に此人通はれしを、妻なる人深く嫉み、夫に身を離れず恨みを成せば、遊女は假なる者にして夢に酒酌み現に歌舞を聞くのみ、更に誠は無くて氣を暗す間の戯れ、其方もいざと諫めて、其れよりは夫婦一つの川舟に竿ささせて、行きては歸る仇波の、身は浮草の花に譬へ、咲きて萎るる限りと螢を石火の明方に見成し、名残の座敷も妻女一所に別れ、假りにも枕は見ざりき。是程執心深き女は、世に女も有るに勝れての因果なり。或時また通ひ船に夫妻とり乗り行きしに、闇を好める五月の末、川音靜かに瀬瀬さし下だし行きけるに、此妻俄かに身を惱み心を取り亂し、子を取り上ぐる婆母よと云ひけるに驚きぬ。折節船には女は無く皆男なれば、此時の用には立たずして介拘すべきやうも無く、磯邊に差寄すれども、里遠く何れも途方に暮れける。此男の身にして一しほ悲しく、當る月ならば何とて語り給はざりしぞ、常に替りて大事の身なれば其家を出づべき事にあらず、恥ならぬ事を深く祕し給ひて斯かる難儀を見る事ぞと、とやかく歎く中に、其時節來て平産して娘の初聲忙しく、是れ

は片寄せ、其母氣「母儀カ」頻りに眠るが如く世を早う成りぬ。是非無き仕合沙汰せず、屋形に歸り、宿にて斯く成り行く首尾にもてなし、悲しき無常を見しに、此子は命有りて猶また歎き彌増しなり。是れを思ふに此妻は卑しくも嫉妬より其身を失ひける。女の胎前に住家を出づる事假りにも無かれ、是れ不覺の第一なり。此娘乳姥に預け育てさせけるに、十四の年越して世間勝れて大人しく、然も生れ付き不足なかりき。同じ家中の某の方へ縁の事契約して、此年の暮には必ず送るとて、京にて道具を調へ置きぬ。此息女其れまでは母は病死とばかり覺えしに、女は口かましく、船にて難産の最後、つどつどに姥が語れば、是れより狂亂して母の事暫時も云ひ止まず、世の聞えも見苦しく、色色の養生するに其甲斐無し。父も是れに氣を凝し、程無く相果て、外に男子も無くして此家絶えて、自然と其名の廢る事遊興に好み入り武士の私ありし故なり。既に下下爰を見捨て、氣亂れたる娘ばかりに成りぬ。最前申し交せし壻の方より是れを引取り、此身に成るを嫌に紛れ無しとて、快く看病致されしは是れまた武士の本意なり。其後祈禱さまざまなれども、母に愁歎日に募り、各困憊みて内談とりどりの折節、物事に工夫深き人の云へり、此病性醫術には叶はじ、某存する旨有りとして、彼の息女に出で會ひ、其亂れたる心に我も亂れけるに、自ら此人の云へる言葉を聞き入れし時、其れ程母の懐かしくば難波の大寺の神子を呼び寄せて、冥途の事ども口寄せて聞き給へと云へば、大方ならず喜び、有難き教ぞと是れを願ひける時に、神子を招き亂人の様子を内證にて云ひ含め、梓に掛けて呼び出だす。見ぬ世の母に逢ふ心地して袖は涙に耳を澄ませば、此神子

喚き出し、げにや人の子の習ひにて、親の恩愛思ふには夫の心に従ひ、不斷は世を大事に思ひ、命日には精進、香花摘みて弔ふべきを、朝暮歎く泪の熱湯の玉降りて身に掛かりての苦み、たまたま佛果を得て九品の蓮臺に坐して浮世を忘れしに、汝歎きて障りと成り、今よりは子にあらす親にて無し。人間生死は一度は遁れず、愚かなる志浅ましいかなと、疊み掛けての立腹、座中も興を覺ましぬ。此時娘、母を恨み心に成り、其魂入り替り、正氣に成りて此事終り、其後常に變らねば、祝儀を取急ぎ、いよいよ此家繁昌と成れり。斯かる例唐土にも長明子が養生の才智に見えたり。

二 歌の姿の美女二人

古代八重垣の歌の種、雲州大社の神主某とかや、俗姓は武家の末子なりしが、世は様様の家業、神職の名跡を繼がれし。常に歌學を好み入り、二十一代集を残らず讀んずる程に成りぬ。神書考へる程は無けれど、歌道は神主に似合ひたる心掛とて人皆是れを譽めける。過ぎにし世世の歌人に魂入り替り、世上の事業は嘗て知らざりき。中にも伊勢、小町が歌のさま思ひ付き、昔は女さへ斯かる心の長高く、婀娜しき人も有りけるよと、是れのみ平生思ひ遣り、伊勢が心は歌の詠み方にて大方斯く有るべし、小町が心は歌の風情に知られけるが、伊勢は如何に艶なる貞げせ、小町は如何なる美形ならん、今の寫し繪も古を見傳へて、八重櫻の陰に人日紅の袴に十二單の紋柄の美しくしみ、また身を浮草の根ざし心ざし、誘ふ水あらばと打

任せたる面影に繪扇を挿したるは、姿繪さへ眞向に顔の見えざる事の恨めし。其時節に生れ合せたる世の人の仕合なり、今も此二人の美君昔の形の變らず、佛の國におはしますべし、我れ勿體なき歌道の縁に引かれて伊勢小町を見る事ならば、只今息絶えて往生すべしと、塵の世に命を惜まず、幻の如く成りぬ。日數經るに一年も花の咲く時春ぞかし、雪に冬かと思ふばかり茫然として十九歳、其後は居間を離れ、山屋敷の月の爲めなる所に、獨り住みて浮世の人に逢ふも煩かし、朝夕も養母の心つきて、自ら運ばせらるる外は何の願ひも無し。或時召使の女に枝ながらの楊梅を贈られ、せめて汝は言葉を掛け交し、心の盡きたる様體を見て參れの由、御使に罷りて程無く立歸り、不思議を顔に顯はし、彼方には目慣れざる都上鴨の二人まで御入ましますと云ふにぞ、此事に任せず、其女と連れて立ち行き、繁りたる綾杉の垣間見しに、女の云ふに違ひて常なれば、何か心に遮りけるぞと荒げなく呵りて歸る時、庭に咲きたる夏菊を愛して上鴨二人おはしける。母驚き、女心のせ「はノ字脱カ」しく、此事主人に告げて、病氣も斯かるか、美し女を一人ならず京より呼び寄せ、是れを忍べばとて顯はれぬ事や有ると、世の聞きを構ひ給はねば、其れも見にまかり、是れも覗きしに、正しく見るも有り見ぬも有り、また何れか實ならんと行きて見しに、正しく古の伊勢小町が佛に違はず、世の取沙汰も宜しからずと、神職の家ながら心の猛き人を密かに招き、是れはと内談せしに、彼人おつ取つて云へるは、是れ眞の女にあらず、其仔細は僅かに此家の餘慶にして、都より然る美女二人まで爰に呼び下だす事思ひも寄らず。察する所狐狸の業ならんと云へば、座中是れぞと一

筋に同心して、氣色も是れより募れば、此儘には置かれじと勇ある神主是れを請取り、木蔭に立ち隠れ、半弓引掛け放ちけるに、形に當ると見えしが、消えて草花のみ残り。つまりつまりまで大勢分け入り尋ねしに、何咎むる者も無く、唯だ無分別に手柄と覚え傳ふる。其後睡みし氣病の人を起せしに、其儘に相果て、早事切れて各歎くより外無く、奇妙なる事世の咄に成りて止みぬ。是れを思ふに唐土にも學文に入り、精氣盡きて己が魂煩ひ、青赤の鬼に形現はれ、得道して後忽ち失せし例あり。是れ離魂と云ふ病の類ならん。甲州信玄公の家臣某とかやの妻女、勞する氣の積つて何時と無く其形二つに成りて、物云へば同音、立居も一度に動き、何れか前後と見分け難く、二人共に藥を與へて、世に斯かる事聞くは傳へて始めなりと、武家一道の廢るばかりに是れを歎きぬ。各愈議するに濟み難し。信玄公此二人の女を召され、御見分遊ばしけるに、暫く落着せずして御思案めぐらし給ふに、左の方の女本身に有らずと御指圖に任せ、役人立ち替り改むるに驗無く、爰は二つ物影なりと、各危めける時、狸の嫌へる身の責は無きかと重ねて上意あれば、青葉の松折り燻べて煙らせけるに、正體顯はし逃げ去りぬ。跡には何の仔細無かりき。信玄の御眼力誠に以て名大將なりと、萬人是れのみならず感じける。

三 市に紛るる武士

古代石州の高角山に、浮世の月を見果てし人丸塚の程近く、松年經りて不斷聞なる處あり。爰を見立て寂莫の苔の扉を閉ぢ、人倫絶えて身を隠し、年月自ら忘れて息引取るまで翫びに横笛の外は無し。さながら仙家の境界、斯くなるこそ心からの心なれ。是れに樂み極まる時は悲みあり。此身も今日を暮すべきに、糧に盡くれば馬の杵を作りて海邊の市に立つも是非無し。此者見知れる者ありて云へるは、昔は筑後の國守に仕へし人なるが、今の有様不思議なりと、假葺の穗屋に招き、心ある人の尋ねけるに、常に無言なりしが、意味深き市人と思ひつらん、珍らしくも物語りしける。されば武士の身は何國を住家と定め難し。自分の外人の事にも義理の一命を捨つるも習ひぞかし。主人の御役に立ち、武家至極の事に命の果つるは毛頭悔むにあらず。或は親類の禍、相役または傍輩の中には是非も無き一味、少しの事に身を捨つるなど、然りとほ口惜しき仕合、一分の理立ち難く、其家を失ひける。其身分際相應の所領に預り、私に命を果すは、木石同事の心底なり。其働き勝れ、相手大勢を討つて何の高名に成り難し。誠は自分の意趣堪忍して主命の時進むを侍の本意と云へり。是れを考へ身の用心をすべしと賢き人此道を示されし。今時の武士、身を修むるとて、小者に髪月代まで致させ、鬚は氣遣ひして自身に剃り、又は内儀に打任せたる有様、此用心愚かなる故なり。仔細は家來に氣遣ひする程の身ならば、自然の時も此下下逃げ去り、何の役にか立つべき。不斷に憐愍を加へ置き、大事に及びて主人の命に代り、己れと勇むは常を忘れぬ所なり。されば用心の事譬へば山賊海賊ありと云へば人数を催し、夜道は無刀にして其處を通らず、身の難を遁れ易し。常住怖ろしきは疊の上なりと莊子が達生篇にも用心の事を書けり。人間の生死遁れぬ處も、舟は能く楫取日和あつ

て風波萬里も渡海す。住家離れぬ人も不養生にて病死、思へば用心辨へ無き故なり。士農工商ともに此心得肝要なり。殊更其家業疎かにすべからず。其家に入り指南得るからは、志各別の違ひあり。是れを改めて習へる事第一の道理、孟子の曰、矢人は函人より不仁哉と。同じ武道具の細工なれども、矢を短く人は通して一命を取る悪心あり。鎧を威する人は弓矢を遁れ身を助くる善心あり。念は通ずる大事、今此身に覺えたり。我が國の守に仕へし時は、役義勤めて外は安樂に暮せしに、武藝は疎略にして未にて閑居を願ひ、横笛の音を類ひも無く好み入りしに、自ら此身に成りて世を送れり。其時小刀細工を得て朝暮慰みながら、要事を達するも重寶なり。此人の心根浪人の節は是れを渡世にもと思はれし。案の如く國を退く首尾出で来て、隱家を津の國住吉の里にして、松の葉の散り失せぬ松毬を拾ひ集め、雉子に見立の作り物、是れは童の翫びして其日を過ぎぬ。また小賢しき人ありて咳氣藥などは手前に合せ、後には外の病氣までも密かに療治する程に成りけるが、是も御暇出だされて後、豫州松山の片里に立ち越え、醫者の眞似して年月を送りける。其外廣き家中なれば錦錦心の人人、武士は表に立て内内は末末のかくまへせられし方残らず其思はくに成りぬ。侍は當分の奉公を大節に、儉約蓄へせざるこそ本意なれ。古傍輩の中に勝れて武藝を勵む二人ありしが、終に其れとても役には立たず習ひ得たりと云ふばかりに過ぎぬ。然れば番組勤むる人並に何か替る事無し。或時中小姓三人不斷心の合ふ友として、外を構はず見苦しき程念比に語りしが、斯かる志より家の掟を反き若道を好み、互に取持ち家中を騒がす事横目役より掬めしに、是れを遺恨に三人として討ち捨て、其屋形の内蔵に取り籠りぬ。大殿御立腹あつて三人共に搦め捕る手段と仰せ出だされ、體に利を得る器量を穿鑿せしに、右の兩人ならで指圖すべき方無し。此二人として相手は三人籠りしを、仔細無く生取にせよと上意を蒙り、二人此時と申合せ、彼の内蔵に駆け込み、三人の中、一人は御赦免との掛聲、死覺悟の者ども、此言葉に命惜まれ、画面に憤を止めて退くを、二人取り伏せければ、残る一人安堵して拔身鞘に納めし所を異議無く取つて搦めぬ。此手柄類無しとて即座に兩人共に御加増下だし賜はり、武士に限らず此志は市に立つ各とても此道を能く勵み給ひて、算勘日記を暫くも怠り給ふなと語り聞かせて終りぬ。

四 書置の思案箱

古代下野の守護に仕へて武家隨一の人あり。流年盛りの時も過ぎ、黒髪山も霜を削れる齡と成るまで其役儀を勤め、一生身樂に私無し。然る程に老病此度の限りと成つて惜ませ給ふ事大方ならず。此家繼ぐべき男子三人名跡は正しく、何れにても心任せに未だ存命の内に目得え受くべしと、是れより願ひ奉る事も有難き御意なり。存ずる仔細之れ有り、某病死の後書置の通りに仰せ付けさせられて下だし賜はれと三家老中を以て言上申し、此者常ならねば如何なる所存も知れず、とかくは願ひの通りと御前首尾好く相濟み、元より心に掛かる夢も無く、思へば假の枕、錦の細を嚴れども、夕の煙ぞ形見なる。室の八島の土に還る

一世の榮華多生輪廻の基なりと、臨終正念に日頃の覺道を顯はし、何の二念も無く終られける。其れより百日過ぎて諸役人親類立合ひ遺言の狀箱封を切り内見せしむるに、書き残されし筆跡も無く、三人の子の名を付札の蓋のみ残り。此外しるべも無かりき。また内證を改めけるに、桐差の枕箱三つ有り。是れに合せて錠前明くるに先づ總領には大房付の珠數二連黄金百枚、二男には丸頭巾に添へて黄金百枚、三男には脇差是れも黄金百枚、何とも家督の實定し難く、此通り御訴訟申上ぐる段段聞し召し分けられやう、先づ總領は出家に成るべし、二男は豫て病者と云へば向後樂人と成るべし、三男親が所存の通り右の役儀相違無く仰せ付られ有難き仕合なり。二男長劍を止めて置頭巾を人も咎めず、總領は思ひ寄らざる出家して無學無分別の身、麻の衣に成りて都に上り、北山の近里に永代寺領の付きし所を敷金を以て後住と成りぬ。今時の上人法印學力より入るは稀なる事なり。或は六根不具の輩、または高家大名の末子方附け所無きを是非無く出家と成せば、世の人を勧める事思ひも寄らず、其身の取置きさへ覺束なし。沙門に成れる見せしめには、衣着して精進勤むる分なり。昔少年見立發明なるを出家に成すが故に、名僧も出で來て衆生を利益ありしが、今は末世に成りぬ。道心は大石の如し發し難くて捨て易し。學徳あらずとも其一心誠ある時は是れ佛體なり。調達が六萬藏の經を誦せしも奈落を免れず。慈童が一念の悲願を發して都率に生れき。唯だ願ふべきは後世の一大事と觀念の窓に閉ぢ籠り、所有三千世界の書籍を目開き尊僧と成り給へり。是れもまた諸人歸依を成す事の煩かしくて、爰を遁れ入日の岡の山深く閑居の徳を身に覺えり、男女の堺無ければ愛欲の

心無し、雜言無ければ鬪諍の恐れ無し、是非の友無ければ讚毀の誤り無し、人の失を見ざれば他の過を談せず、人に對面せざれば禮義の煩ひ無し。是程氣散じなる山の深きを知らず、淺き麓の世間寺常樂我淨今の身なり。父死去の砌物領なるに出家の指圖少しは口惜しかりしが、斯かる時難有く此恩忘れず、手づから襦の實を拾ひ山原に蒔かせ置かれ、是れ大木と成るを得て、一字を建立と宣ひしに、若僧ども可笑しく、今も知れぬ命に、何時の世の爲めならんと云ふ。程無く年年經りて願ひの如く大堂建てさせられ、梅檀堂と申せしも昔に成りぬ。

五 兩方一度に神降ろし

古代神路山の奉行發明天の理に叶ひ、善惡二人の穿鑿落着せし事あり。其頃古市と云ふ處に歴歷の浪人身隠して數多住みける中に、同じ心の友三人他事無く語り合ひて、身代の事まで内證を包まず、何れにても主取濟まば合力して取立て申すべしと互に武士は頼もし。其日暮しの渡世も心は朽ちず時節相待ちしに、一人丹州に親類有つて其人取持ち身上濟みて、昔に歸る春の雁、好き友二人への名殘惜しく、互の心は書狀の取り交し必ず忘れなど云ひ交し、明日立つ旅の夜すがら乘掛葛籠を拵へ、暇の身の手業に觀世紙縫も此度の用に立つとて笑ひ、機嫌に酒酌み交し、明方に爰を立つと云へば、其時分に來りて門送りせんと二人は私宅私宅に歸りぬ。俄雇の中間草履取もそれぞれに旅の別れとてぞ立ち歸りぬ。跡には彼の侍一人夜の明く

るも今の事ぞと戸鎖し引きたて燈火掲げ、丹後までの道筋の書付、天の橋立松も此度見る事よと、快く睡眠み、跡付枕に夢も結ばぬ程過ぎて、最前の雇男二人來りて戸に音つれ、明方とても程は有らじ、御用意と聲に申せど、内に答へ給はぬを不思議に思ひ入りに、檀那と頼みし人は寢姿其儘切り伏せ、其身は抜きも合はせず鞆に手を掛けたるばかりに淺ましく果て給ひぬ。是れはと驚き近所を叩き立て人殺しよと騒ぐに、長袖交りの町人暫しは恐れて出で合はざりし折節、二人の浪人來りて是れは思ひも寄らず、段段様子を見るに内證知らざる者の爲業にあらず。國元より遣はされし路金宵に見し者は、汝等と二人の雇中間小物を二人僉議無しに搦め、其れより此沙汰私には濟まずして各奉行所に出でける。如何様雇ひ男申さんも斯かる當座の繩、爰にも宿を定めず東國の道中に暮し、無分別なる眼差し、人皆是れを憎み、假りにも頼みし主殺し、やがて御仕置に合ふべき者と、人擧りて是れを見明むる。其後御僉議あつて旅用意の物ども残らず檢められしに、路金も有りの儘に諸道具一つも紛失せず、殊に近所へ告げ知らずも男どもなれば彼是以て別條無し。其繩御許され御落着きまでも其宿に預け置かれし。二人の男御意の通り有難く、さてさて我我に理不盡に繩掛けられし兩人年月親しく語られし由、其中如何なる意趣遺恨も存せず、疑ひは此浪人家より外は無し。討たれし方は假初なれども主人なれば、此僉議遂げさせられ敵取りたき願ひ申上ぐるの處、神妙なり、彼の者ども所存の通り此討手四人を免れず、一度二人を縛むるの過意に、先づ兩人を一入つつ引分け座敷籠に入れ置き、其儘に何の仔細も無く捨て置かれし程に、次第に退屈發れる折柄、御思案

を遊ばし、御口眞似も申されし役人を遣はされ、今度の闇打、詮ずる所兩人に極まれる證據あり、其段は直に申渡さるべし。されども兩人一所に申合せて討たれし事や、また一人して斯くはせられし事や、有無の穿鑿今日に極れり。たとへ尋ねたればとてさすが歴歷の兩人よもや白狀は。然れば神文にて討ち給はぬ志、申譯し給へと、硯料紙を渡し二人共に書かせ給ふに、上意に任せ過り無き心底、心に書き認め是れを差上げる。密かに内見遊ばしけるに、何れも文者能書にして然りとては書きつらねし兩方疎か無かりし。就中一人が書けるは少しも品紙を置かず十八枚に筆を動かせ、今一人が書けるより六枚増して然も日本の諸神諸佛、さる程に思ひ出でて此事知らざる心中正に文勢に現はれ、讀む人だに身を慄はせ、神罰恐ろしく成つて肝に銘じける。奉行も是れを鑑み給ひ、文法働き書き續けたるにあらず、正直なる故に自然と天の知らする道理是れなり。今一人の成せる科には極れり。然れども侍たる者を拷問成り難し、喰物に鹽過ぎたる物を與へ湯水を斷つべし。おのづと正氣亂れ現の如くなる事なり。時に様子聞くべし。仰せに従ひ其通りに仕掛け見るに、五十四日過ぎて次第に實れ、大方亂人形義に成つて人の詞は耳に疎く、其身遁れぬ處に斯く永永の難儀、侍の覺悟の違ふ故なり。此遺恨打たでは成らざる首尾の段段申し残し、潔く切腹あるべき所なりと書き付けて是れを見するに、尤もと思ひ込み、其身の耻を顧みず、此者討つたる次第を夢に語りぬ。彼の者永永の苦しさに差し詰り、其家久しき重寶三浦代代軍書の十二卷當分の質物に頼みしに、勝手よきに任せ後日構はず賣拂ふ事、是れ武士の道にあらず、評判に及ばぬ所なり。されば此度身體濟

むなれば、追付金子調ひ請け申すべき時何とも申譯立ち難く、非道を存じながら彼の者を討つ事天命の盡きなりと、今は包まず語りて忽ち舌喰ひ切りて果てけるとなり。

新可笑記

卷五目錄

- 一 鑊を引く鼠の行方  
武士は眼前に誠を見出だす事
- 二 見れば正銘に有らず  
武士は初めて一座大事の事
- 三 乞食も米に成る男  
武士は心の朽ちせぬ浮世の事
- 四 腹からの女追剥  
武士は其時に替る子供の事
- 五 心の切れたる小刀屏風  
武士は心の素直なる者と知らるる事

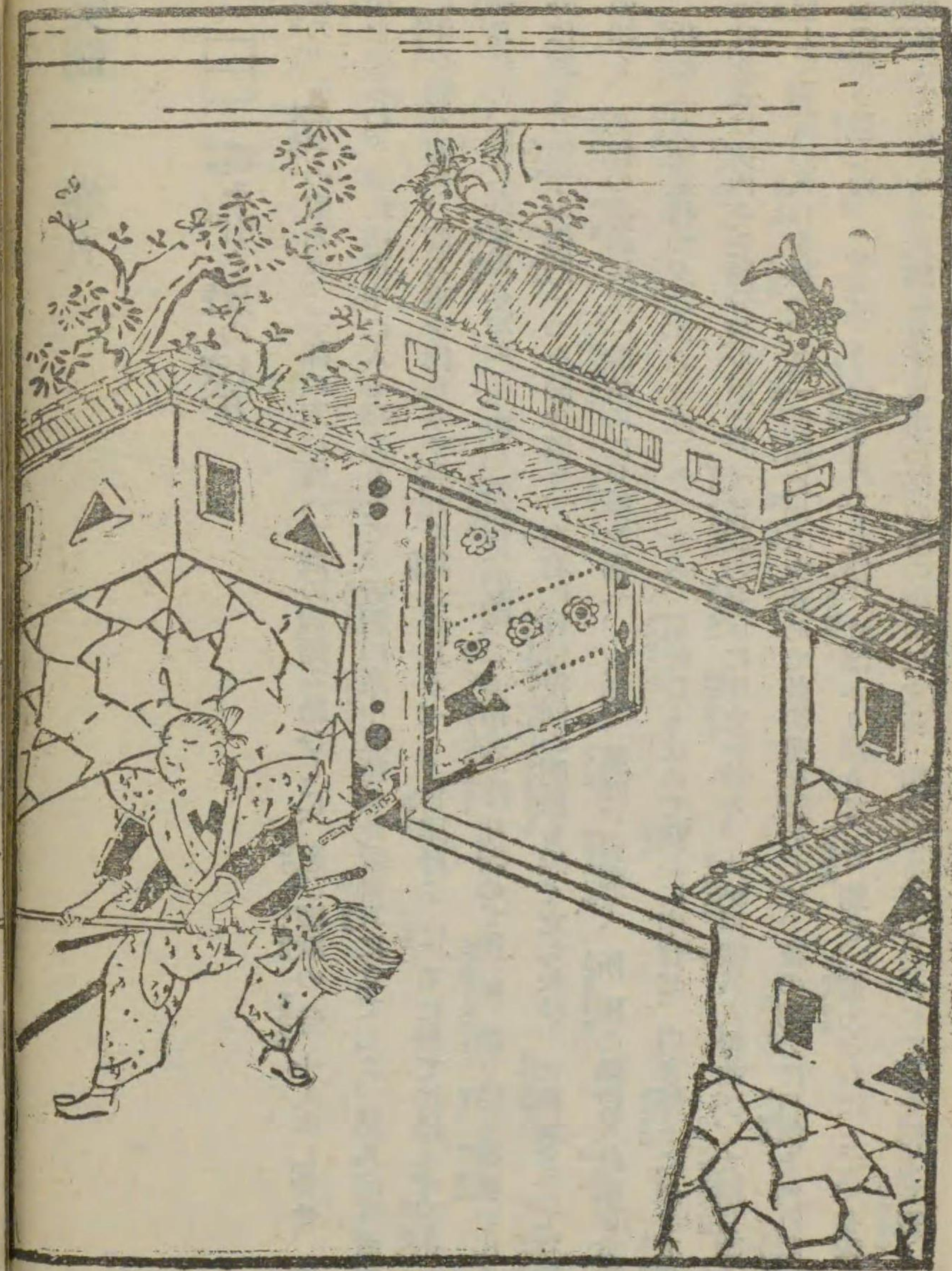
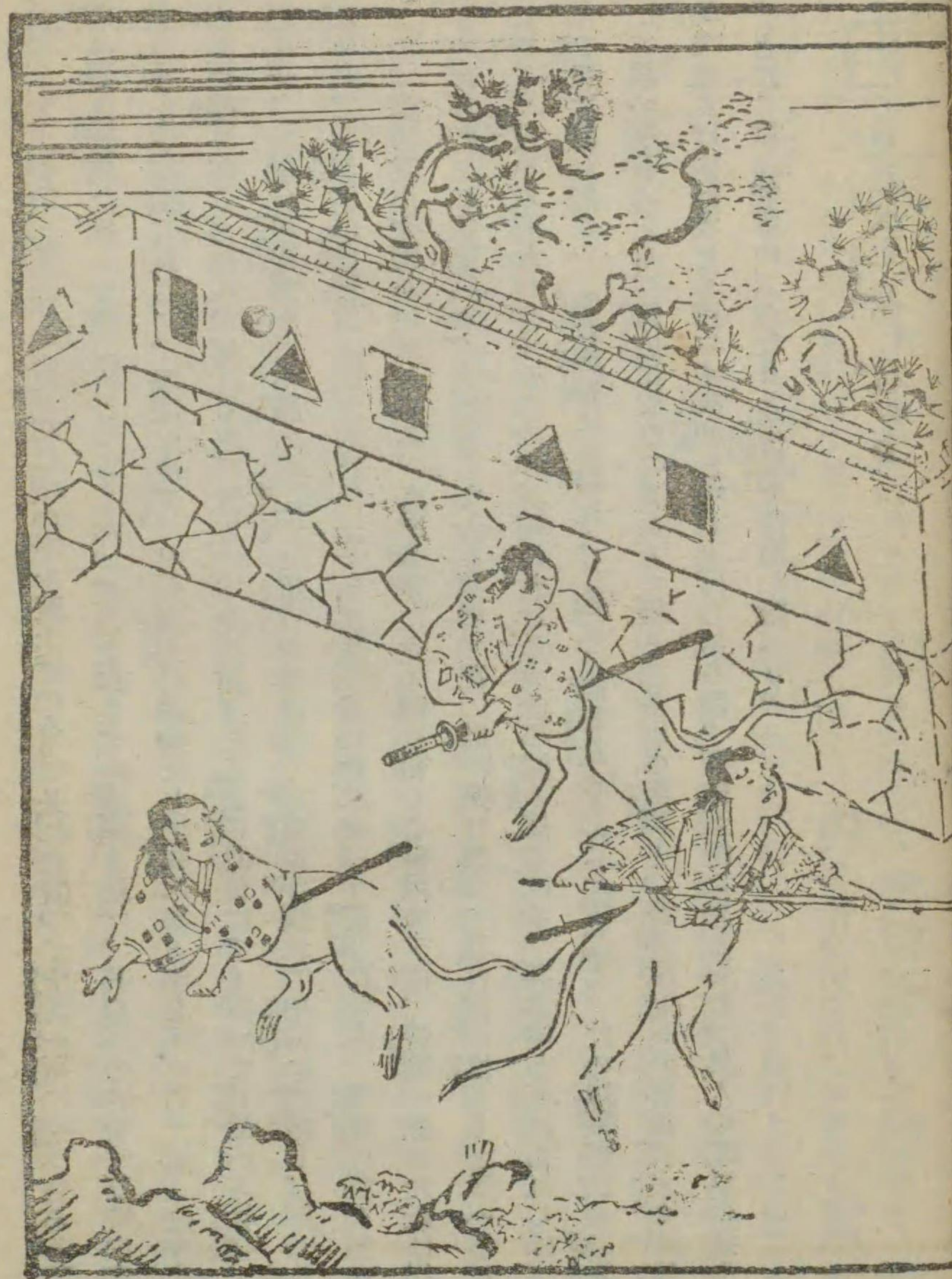


新可笑記

卷五

一 鐘を引く鼠の行方

古代關東くわんとうの中に高名かうみやうの家あり。子孫の末に傳へて武の道勵み給ひしに、忍しのび調練てうれんの侍さむらひ十人申し合せ、此家に御奉公ごほうこうを望みぬ。是れは軍中に入る事ありとて、近習きんじゆの衆中取持ち此段御耳このゑみみに立てしに、然らば其者忍しのばせ書院かきいんに甲かぶとを飾り置き、取る事を得たりや是れを試かかして見るべし。首尾しゆび好く仕つかまつるに於ては残らず召抱めしかかへらるべき御意ごいにて、既に其夜陰やいんに定め、不斷ふたふたの番組ばんぐみは勿論、一家中若侍相詰いっけちやうわかまがらひめて所所詰ところどころつまり詰つまり御番ごばんを仕つかまつりまつり、外は閉とぢて追手おいつての御門ごもん一つを開ひらき置き、左右に目付役同心めつけやくどうしん明所あきところも無く立ち並び、大篝おほかき燒やき立て挑燈てうちんの映うつり晝ひらの如く、高塚たかづかの根基ねきには一間狭いっけんまみに足輕あしがらを備へ、玄關げんかん、廣間ひろま、長廊下ながらつか、所所ところどころの諸役人しよやくにん此處ここを大事だいじと相詰あひまつめ、折節せせつ五月閨風ごごかぜ待つ夕ゆふながら、互たがひにたしなみ、扇あふぎ使つかひも止とめて竊ひそかに申合せ、白しろき帷子かたびらに黒くろき衣裏えりを掛け、皆此衣裳みづちは御内みうちぞと随分氣きを附つけ、大書院おほしよんの長床ながとこに甲立かただてを飾り、大納戸衆おほなうしゆ八人居並び、大横目おほよこめ兩人中程ちやうどに逆座さかさまして書院いりいんの入口いりぐちを檢しらめ、其一間切いっけんぎりに出入でいりを止とめて此御番このごばんを勤こめしに、夜の明方あけがたに自然しぜんと何れ眼まなこは常とこにして心の眠ねり萌もしぬ。やうやう人ひと身みも見えし時とき甲立かただてばかり残りて各驚おのおのおの驚おどき、通と力りきなればとて、是程まじの諸役人しよやくにんの眼前がんぜんにて斯ごとかる不思議ふしぎを見みする事自然しぜんの時の御用ごように立ち、如何いかなる事も是これにて利ちを得える重寶ちゆうほうと此評このひやう



判の通り言上申す處へ、早忍びの者未明に彼の甲を差上げける。是れに依つて十人一所に抱へらるる時、家老の某先夜は持病に痛み登城仕らざりしが、翌日上がりて此義聞き届け、其忍びの者を呼びて白晝には成るまじき事かと尋ねられしに、我我が所業、是れ神力の祕術にして夜の事と申し上ぐる。然らば今宵拙者一人奥座敷に罷り在るの處へ、何れも忍び入りて、見え渡りたる武道具何にても取つて見給へと所望、其意を得て退出す。家老は成程靜かに不斷の勤所に燈火を掲げて、毛貫を手觸れて中眼に見廻し、四時半時の時計を聞くに、鼠三疋友連れて暗かり紛れに走り行く。其れには構はず勝手に立ち、逸物の猫を氣を付け見られしに、鼯も動かず豊かに臥しける。急ぎ本座に立ち歸り暫し心を澄ますに、最前の鼠また駈け出でしを、後より慕ひ行くに次第其形大きに成りて犬に見増す程の時、飛び掛つて我れ猫の性なりと云へるに、此一言形に應じて位を取られ、さすがの忍び男現はれける。此事諸人感じける。其後申し上げられしは、當家代代御手柄世に隠れ無し。先君親殿にも後れさせ給へる御器量とも存じ奉らず。此の以後軍法の方便武士の正道にて勝つ事有るとも、御内に忍びの者ありて世とは各別の表裏と、此沙汰せられては高名の御家僅かの事に廢るなれば、此者ども残らず御暇と申し上げらるる段、道理至極に思し召し、其人の願ひの通りに濟みける。とかく武は智勇の二つなりと軍策を指南し給へり。

二 見れば正銘に有らず

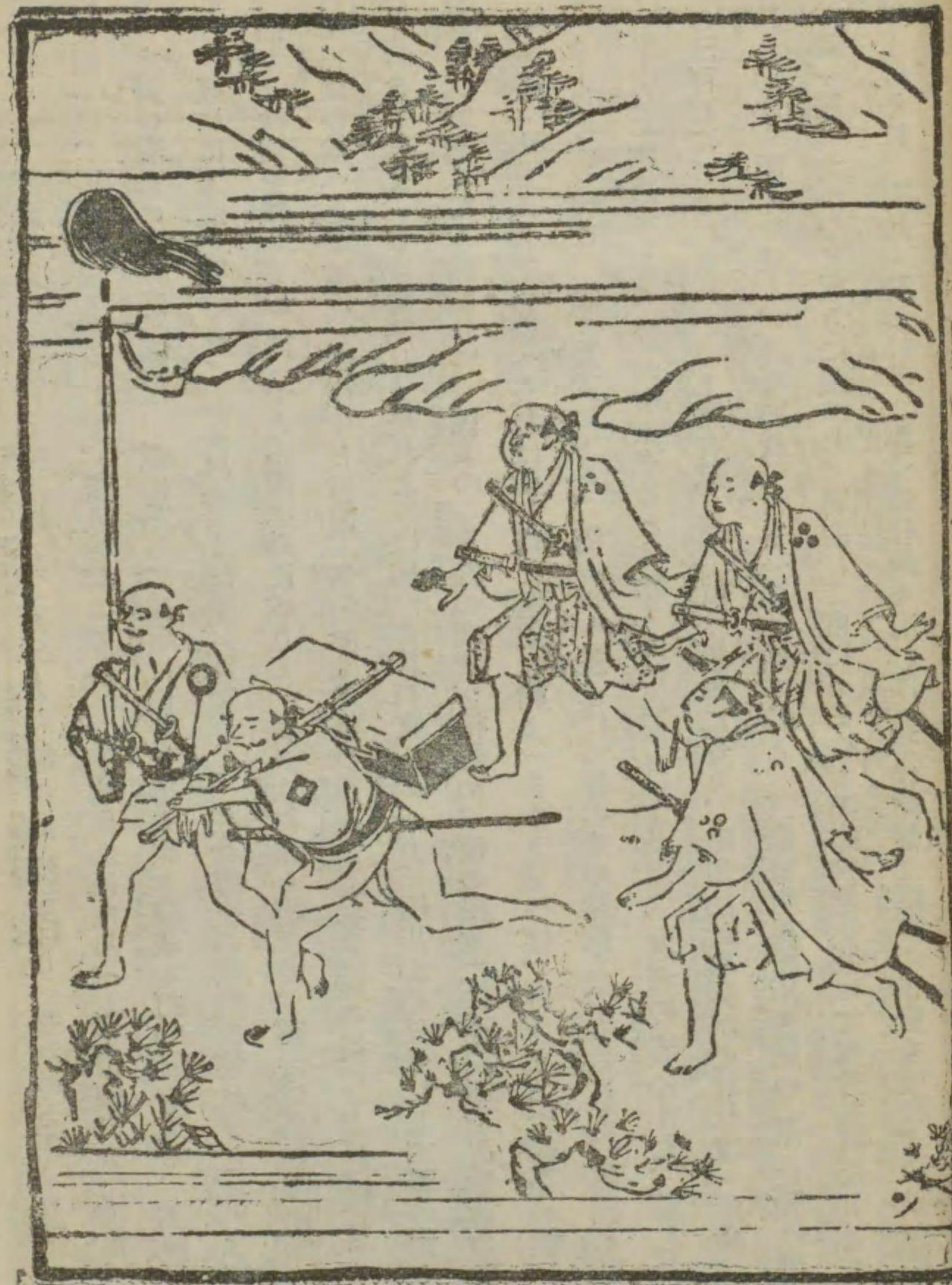
古代播州赤松の家に執權兩人して、武家百姓の事まで仕置致されけるに、智仁勇の備はり此掟を守り、五日の風枝を鳴らさず、十日の雨にも動かざる土の車の兩輪の如く、直なる道を行はれしを主人も喜悅ありて、家の重寶此二人なりと、官位も知行も屋形も大手の兩角を下だし給はり、萬事を双方ともに少しも甲乙無きやうに殿より遊ばしければ、猶又一家中兩家老に思ひ付き、禮儀を成し諸事音物までも替らぬ色を遣はしける。同じ家中に代代三百石より立身もせず、役目の馬一疋は繫がせて終に御用に立たず、年月御廣間を二十人して四番に勤め、此外は暇にして主人の貞も五節句の外は目見えも無く、外様役にて暮しけるが、天性善き侍なり、武士の作法一つとして知らざる事無し。されども出過ぎて御奉公勤め強つても成らず其役目の末座に下り、未だ元服の月額青く釣髪跡見し人、仕置者として愚かなる言葉の末、分別禿の頭を下げて、何事も御尤もと云はねばならぬ世上、是非無く子供が爲めに此家を離れ難し。此人の云へるは、總じて其家の執權は勝れて其徳備はりしを一人、其れ續き智勇の人段段有りて其家治まる。牛角の家老立並ぶ時は必ず其家亂る。仔細は其身は道を守れど自ら寄子と云ふ者、誰方彼方の色を立て、思はざるに外より威勢を付け、何時と無く不愛と成り、主人の御爲め宜しからず。家老は大名分に控へ、仕置者は智有つて鷹揚なるを立て、郡代鍛鍊深くて十呂盤に疎からぬが善しと云へり。賢き人の言葉は違はず、家老の兩人邪義を差挟み、此家治まり難し。時に男子の有る方へ女子を貰はせ、縁者に成し給ひて後相續せり。其後一人は一子若年なれども家督を譲り、病氣分に成り隱居の願ひ相叶ひ樂みを極めぬ。其後一人の心任せに治め、

相手は婿なれば萬づに如才無し。諸事上に好ませらるる事を勵み、萬づの事に奢とは成りぬ。是れ程賢き家老さへ無念ありて後悔歸らぬ一言なり。豊後より去り難き人に頼まれ、望み尤もの浪人受取り、いつぞの首尾に申出だすべしとかくまへ置かれしが、此者正道にして話相手にも快く、朝夕一座に遠慮無く罷り在りしに、此浪人少し道具目利傳受して大方なるは見極めける。或時貞宗の刀銘かかへて中心正しく銅元に僅かなる地荒れ有りしが、一寸五分上げて二尺二寸の刀、差添に是れぞと下直に調べ、我が働きに成せる名劍手に入る事と武士の悦べる所へ、家中一番の目利者何の某見舞に來るに幸ひと此刀を見せて、正銘あらば調へんと自慢にて見せ給へば、鞘より四五寸抜き掛け、心を留めて見るまでも無く正銘に有らず、御無用と申す。其座に彼の浪人在り合はせける、家老其儘引合せ、終に此方へお近付ならず、是れは豊後の浪人衆自今は別して御語り賜はれと挨拶、さては此浪人が肝煎にて此刀求められし、思ひながら是非無し。浪人其座を立ち行けば、爰は通れぬ所と覺悟して、玄關を立ち門外に出づるを浪人切り附けしに、心得たれば抜き合せ肩先に僅かの擦傷負ひて何の仔細も無く討ち留めぬ。此首尾残る所無し。旨趣を言上申すに、浪人無用の意恨を挟む所少しも此方には越度無きに相濟まし、其通りに相勤め十年も過ぎて此御家御暇申し受け、加増大分の仕合にて大和の國に在り付きしに、其れまで用心油斷は爲ざりし。敵の末とても知れ難く身を安樂に暮しぬ。其城下より當年九つと申す小坊主を抱へ茶運にして使はれしに、取廻し利發なれば不便加へ置かれしに、或る夕暮に端居して後より團の風を當てさせ、心の儘寝られしが、骸ばかり残りて此首無

き事を驚き、様様穿鑿するに、彼の小坊主見えぬ事を不思議と、是れを尋ね、其れが親元は此町驚き、討ち取らるる女なるぞと、爰に駈け付けしに、此女ども行方知れず成りにき。

三 乞食も米に成る男

古代心ざし實なる武士あり、年久しく南部の城下に住めり。然る事ありて同役三人一度に浪人せし事侍の習ひとは云ひながら、身の行末定め難し。妻子引き連れ南部の屋形出でし時、何處如何なる處に住めりとも、三人の入魂は止めじと申し交せし中、松井の某と云ふ人信州松本に立ち越えしが、程無く病死を告げ來り。日比の交誼に其跡を遠山氏の某、是れは武州に立ち退き、親類の交誼を以て時めく御家に身體濟みて先知五百石、昔に替らぬ弓大將、武運は盡きずと悦びを重ねぬ。今一人の古傍輩田川氏の某上方に上るの由、妻子無き身の心易さは今に廻國仕るなり。其後は文通絶えて一しほ其人ゆかしく、住める所の知れなば、吾が身體の事を告げ知らせ悦ばする事も明暮是れを忘れざる折節、近衛の御所へ改まる春の大禮代り仰せ付けられ、年の内より身拵へして、月代も春の色めく三保が崎は自然と松立てて飾る風情、富士の煙の絶えずも大福喜ひなど立ち續く民家を過ぎて、年経ぬる身も若やくと云ふ正月詞に面影鏡山に映し、勢田の道橋君が代の永永と渡り、松本と云へる宮の森蔭に都の春を夢と成し、斯は湖水響き三井の晚鐘を鼻に聞かせて入日を歎かず、曙を喜ばず、無ければ喰はぬまでの二つ五器を樂む物は、陰箱に松風の音、時



に編笠吹き巻くり、面影を見れば正しく田川の某、左の方の額に向疵を印し、是れはと馬より飛び下り、驚き仔細を聞くに、田川常なる顔付して、浪人の時は斯かる身過も何か耻なるべし。唐國にも伍子胥と云へる者あり、主君を養育の爲め形を變へ、晝は臥して夜半に出で、簫を吹き腹鞆を打つ音を成し、萬民を慰めて食を乞ひ、後には天運を聞けり。此身は晝を遠慮の仔細あり。我身晝夜の世間を怖れずと古に變らぬ十面顔、然りとは氣を凝らさぬ侍やと不便は外に成りて、暫し立物語り過ぎて、跡付け明けて路銀の内十兩當分入用に使ひ給へと渡せば、田川少しも悦ぶ氣色無く、世の重寶今吾身の何の益にも立ち難し。人疑へば是れを碎きて使ふべき才覺無し。是れよりは唯だ鳥目百文と云へり。田川が心任せにして都の歸りさまに、東の離を又此處にてと約諾して、遠山の某都の使者を相勤め、彼の松本に行き、田川と數數の物語り暇乞ひ、只今頼みし主人自然召抱へられれば先知にて堪忍し給ふべきかと云へば、其方とまた傍輩の願ひ有れば、住むべきと云ふを悦び、急ぎ東武に下り、御返事を差上げて彼の老中諸役人の附合にて、田川心底さすかの侍と好しなに物語せし事、誰が申上ぐるとは無く大殿の御耳に立ちて、其者の志ゆかし、若し此家に住まば右の三百石にて連れ來れと、上意有難く遠山再び松本に登り、田川に此事聞かせければ、此義は偏に貴殿の取持と心から勇みを成し、此身に成りても一腰は捨てじと、三條室町吳服所菱屋の某に預け置きし具足一領、鎧一筋、大小など取りに遣はし、同道して東に下るに、遠山挾筥を明けて當分是れなりともと、小袖を遣はしけるに、田川一圓受けず、存する仔細も有れば某は此儘と様様の了簡を受けず、破れ薦を身

に纏ひ江戸に下りぬ。直に御目見えの用意、遠山が屋形にて鬘月代も改めんと云へば、田川苦苦しき貞附して、某が事御前へ非人の境界を申上げられずや、然らば此儘にて御前へと申し、遠山興贖めて色色諫言するに更に是れを用ひず、是非無く此義言上申せば、其者が願ひの通り目見え受くべしと仰せ出だされ、非人有りし儘に廣庭に罷り出で、首尾残る所無く御目見え相濟みて、後身を改め御奉公を相勤めけるに、さすが一理窟ある武士にて勤次第に疎からず、其御家の重寶と成りにける。

四 腹からの女追劔

古代の人の云へり、物には同氣相求むる事善に在り、惡に殊更なり。其比は東の奥、道奉行の仕置を用ひず、追劔夜盜の沙汰止む事無かりしに、今君が代の道筋廣く、捨て置いても取り上げざる黄金花咲く海山まで、松に風絶え浪に音せず、人に邪無かりしに、後奈良院大永二年の春、陸奥に隠れ無き盜賊の名取川瀬越の某とて、往來の人を殺害めて金銀荷物押領して、世の外なる分限と成り、身の程知らぬ奢を極め、都を見る始めとて人數多にて上りけるが、遊興の餘りに美女を見出だし是れ戀ひ佗びける。其人は昔に衰へる人の息女なるが邪なる人とも知らず、渡世の心安きは都より東も住み好かるべし、女に定まる家無しとて其盜賊に賜はれば、馬乗物を急かせ古里に立ち歸り、彼の美女を愛して世は世盛と暮しぬ。此息女何と無く下りて次第に由無き世渡を見て淺ましく悲しく、女歸る道も知るべ無く、とかくは身捨て是れまで

と極めし日數も経りて、馴めば其血に染まり、剥ぎ取る小袖の今宵は仕合と云ふを嬉しく、酷き物語も快く切刃を付けし山刀も怖ろしからず、自ら夫の悪心に同じ、其れより年経て娘を二人設けて行末悦びし。此夫病死して便り無き後家と成りてまた東に住むも煩さし。家に有りつる諸道具を夫の同類なる人取り貪りて、残る物とて鎧長刀、直なる心を今は歪めて今日を暮せる便りも無くて、男の爲なる夜の容、街道に出でて、手に合ふ旅人の物を奪ひ取り一日を送りぬ。二人の娘も大人しく成れるに、里近き今日の細布織り習はせる業は無くて、夫の悪を是れにまで傳へて怖ろしく捲へて、武士は避けて町人里人を嚇して、何には由らず取りて參れと勧めける。容優しければ情の道も知るべき娘ども、性は元を顯はし父の心に變らず、毎夜街にて母を羽護込みける。或る夕暮に野澤の一つ道行くに、誰かは爰に置き忘れぬ、續きの絹十疋ありしを天の與へと悦び、姉妹の中なれども色の好き絹を争ひ五疋つつ引分けて、花見る春も近づけば、紅梅藤色にも染め、夏は單衣を卯の花衣に裁ち縫して、女風情作る事を姉も妹も互に欲心出で来て、今宵は姉を伴はずば、自ら一人の物なるに、歸さの廣野にならば姉を殺し絹を丸めんと思ひし。姉もまた分けたる絹を惜み、妹の命を取りて残らず吾物にと、二人の悪心同じくして機嫌好く道を急ぐに、野墓の焼くるを見て姉無常を觀じ、さても口惜しき所存や、思へば僅か絹五疋に現在の妹を命を取るべき心入、さりとは世に有るべき沙汰ならずと、心中に觀念して、とかくは是れ故にさもしきと、彼の絹を人焼く煙の中へ投げ込めば、妹も一度に打燻べ同じ灰にぞ成しける。姉不思議に思ひ、何とて絹は捨てけるぞと尋ねしに、

妹泪ぐみ、今更申すも差かし、無用の物を拾ひて其れから心の外の欲心發り、其方の命取りて、母には旅人の働きのて是非無く殺されたと語り、其歎き顧みず五疋の絹ゆゑ淺ましき志申せば、姉も横手を打ちて我が思入其れに同じ、永からぬ世に生れ、殊に女の身として斯かる惡逆後世の程恐ろし。人を威せし刃物を焼き捨てて是れより菩提に入り、母にも勧めて佛の道疎からず、心にきき三人比丘尼と成りぬ。誠に無明無昧、全依法性とやらん聖の云へる、氷消えては清き水と成る例ぞかし。

五 心の切れたる小刀 屏風

古代家下に神變ある事を語り傳へり。菊酒は加賀の名物にして重陽の御祝ひの水、久しき代代の例ぞかし。大書院は仙人盡しの墨繪、紅の雪の洞に、四季を分たず花咲き實の成る桃の立枝の好もしき風情、何れか大名の御物好、こせらぬ事をこそ豊かなる詠めなれ。殊更近年小刀屏風とて、世に有る程の正銘を集め、小柄の作り物美を盡されしに、其潔き事此上何か有らじ。總じて人は移り氣なれば、諸家中共に清らなる小刀箱を捲へ、其れ相應に嗜まれしは、武士に似合はざる事には有らざりき。其比家老職の家にして秘藏の小柄兩度まで見えざる事あり。竊かに詮議し給ひけれども、其有處知れず行きぬ。また或時御月待執行遊ばされし夜半に、御差領の小柄紛失せし事度重なつて御腹立、此度は都度都度に御詮議遂げられしに、宿り番組の小姓衆の寢道具、茶堂坊主の役にして、葛籠に疊み込む紫蒲團の下より御尋ねの小柄顯はれ出

で、此事包まず横目衆に披露致せし。此小姓の身に覚えは無くして武士二分の立ち難く、是非も無き覺悟に及べる時、召使の小者團八と申せしが、供部屋より直ぐに欠落せし事、其隠れ無く御前の御耳に立てける。諸役人の思はくにも、さては此者が爲業なるべしと極めての御沙汰有りて、主人は當分遠慮して御奉公を引かれける。其上方方へ追手を掛けられしに、未だ國中を離れず、小松と云ふ所の片里にて搦め來り早速注進申上ぐれば、其者吟味役人に仰せ付けられ様子段段尋ねられしに、團八少しも動ぜず、私の心から小柄を忍びて盗み取り候と一筋に申上ぐれば、幾度の詮議も是れに極まり、團八を成敗の庭に引き出だす。時に大横目の某團八最期を相延べ所存一通り申されし仔細は、先づ下人として御腰の物掛かりし御居間まで參るべき故無し。王人は大分の祿を下し賜はれば、何か金銀の小柄なればとて乏しくは存ぜざる處なり。

然れば團八自ら盗み取ると云ふとも其儘に成敗成り難し。是れを察する所、主人の面目救はん爲め其科を我身に引受け、一命に立ち替る事下人には優しき心底なりと、かい取つて其道理を申されければ、皆尤もと評定あつて、此事御前へ申上げ、團八が命を乞ひ受け、重ねて心中を聞き給ふに、各の推量少しも違はず、末末には奇特なる者と世上に其名を觸れける。されば悪事千里を走る。虎林と云へる掃除坊主前後の小柄を盗み取る。然と顯はれ世の掟とは成りける。彼の團八年久しく武士の勤めを退屈して、大正寺の門前なる民家に身を隠し、門は印の杉を靡かし僅かなる酒商賣をせしに、正直を以て世を渡る事、行く水に數書く通ひ樽も集ひ來て、十年餘りに富貴の家とは成りぬ。連れたる妻に一人の娘ありて、今は三歳の春も過

ぎ、卯月の初め比より團八大病を引受け、次第に枕上がらず、生藥を與へけれども更に驗氣の無き事を悲しく、夫婦の好しみ此時なれば、其心に任せ晝夜の取扱ひ残る所も無かりき。今は世の限りと見えし程に、自然亡き跡にても此家の絶えず娘が爲めの書置と様様に勧めけるに、日比は賢き團八も浮世の欲と云ふ物大分の金銀に心を残し、浮雲命の中にも書置はせざりき。妻たる人此心中を恨みながら、身を碎き看病盡しけるに、未だ時節の來らんや、二度驗氣得て昔の團八に成りぬ。悦び日を重ねて後、親類縁者酒事をして呼び集め、露月代を改め、其座敷に於て猶五百八十までと長命を祝ひ、千秋樂を歌ひて後、内儀立ち出で、右の段段恨みの旨を云ひ破つて是非の暇を乞ひけるに、各驚き色色なだめけれども、最期まで妻に惜まるるも夫婦の語ひせし甲斐こそ無けれ、我れ一生の暇と振り切つて出で行きける。團八立腹してやがて思ひ知るべき女心と程無く後妻を求め語らひを成しけるに、三年ばかり過ぎてまた大病に侵され今を限りの時、過ぎにし妻の事思ひ出だして、知るべ有る人に尋ねけるに、其れよりは髪を切りて世を一人仇に暮せしと語りければ、團八感涙を流し、後妻にそれぞれ所務分して、財寶残らず昔の妻に是れを譲り、末末榮えて、おかた酒屋とて、笹の小笹を國中に靡かしける。



元祿元戊辰稔十一月吉日

江戸日本橋青物町

萬屋清兵衛板

大坂眞齋橋筋吳服町角

岡田三郎右衛門行

昭和三年二月二十日印刷  
昭和三年二月廿五日發行

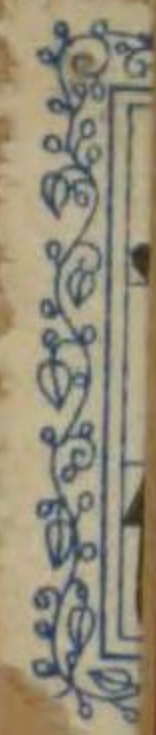
[非賣品]

日本古典全集第二回  
西鶴全集第二

編輯者	正宗敦夫
裝幀圖案者	廣川松五郎
發行者	東京府北豊島郡長崎町一六二 長島豊太郎
印刷者	東京府北豊島郡長崎町一六二 不二製版印刷所 柳井隆雄

發行所

東京府北豊島郡長崎町一六二  
日本古典全集刊行會  
振替口座東京七三〇三二  
電話番號大塚二〇九六番



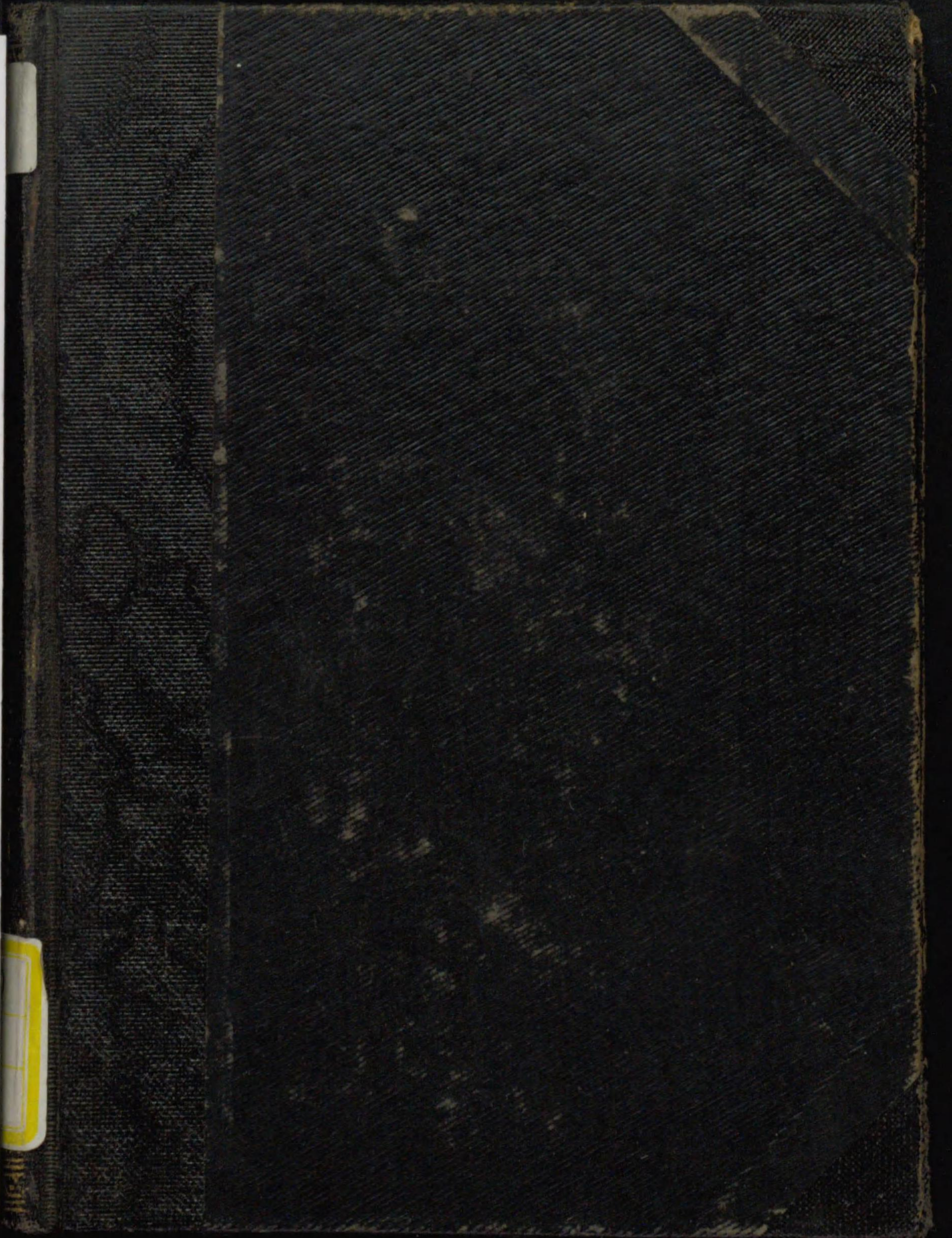


<p>民國二十一年一月一日</p>	<p>第一卷 第一期</p>	<p>第一頁</p>
<p>第一頁</p>	<p>第一頁</p>	<p>第一頁</p>

5  
17



530  
176

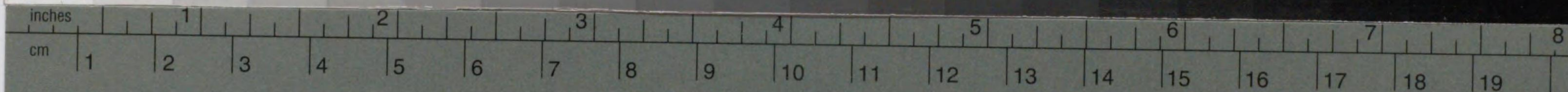


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

